

旅情と郷愁を呼ぶにふさわしい千国街道は歩くたびにロマンを与えてくれる道。一千有余年の歴史に使われきた。旧石器時代に始まる内陸の民はどうか。山裾や稜線を使って最短距離の踏み分け道ができ、固定化されて道になったのだから。ヒスイや和田峠の黒曜石が通った縄文時代には道ができていたことは確かだ。それ以来、いつの時代でも道を拓き、守ってくれる人がいて、歩く人がいる。千国街道は内陸の民と海の民の生活圏を繋ぐ役割を果たしてきた。千国道の古文書上の初見は、文明十五年（1483）の穂高神社の「三宮穂高社御造営宮定日記」にある。

荒神の森

千国諏訪神社の鳥居を前、杉陰の石を右に下る坂が塩の道。千国宿の入り口に当たり、ポッカ・牛方は一息いれて番所のある千国に向かったという。

前山の百体観音群
小谷村には石仏が約二千体ある中で最も多いのが観世音菩薩。特に目につくのは前山の百体観世音菩薩群。観音は人々の救いを求める声と自由自在に救済してくれるといふ。かつては、前山周辺に建立してあったが、今は一所になって旅人を見守ってくれる。石工の腕の冴えは見事で銘文から名工を輩出した伊那の高遠石工二名の手であることがわかる。

明神大杉跡

小谷には俗に三大明神杉と呼ばれる大杉があったが、親の原の大杉は殊の外大きくて目通り15メートル近い巨樹であったという。明治末に伐り出されたという。他に石原の白山社の大杉、中土大宮諏訪社の御神木。

林頭縄文遺跡（はやしがしら）

親の原から鐘の鳴る丘一帯は14ヶ所にも及ぶ縄文時代の遺跡が集中するところ。特に、林頭遺跡は縄文早期に遡る。

南馬北牛

親坂を北から坂をのぼってくれば、南には（佐野坂峠を除いて）もう急な坂はない。千国宿辺りを境に「南馬北牛」という言葉がある。北は牛を使い、南は比較的平坦な道のため馬が主役。大町から南は「中馬の道」とも。

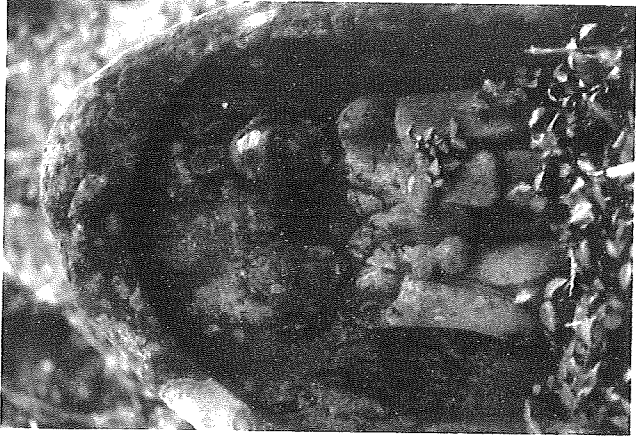
香樹

今から、千三百年にさかのぼる道筋は蝦夷平定のための官道の証としてもいえる地名。東山道と北陸道を繋げる最短の道にある間の宿の役割をもったとも解釈できる。路傍の神に香を掛けて旅の安全を祈った場所。香樹の呼び名は鎌倉時代になると「追分」に変わっていくという。幾つもの峠を越えて、上りつめた香樹は豊かな湧水に恵まれ、親の原原状地の末端に、江戸時代の牛方宿・塩倉が昔の姿を留めている意味は大きい。

明神大杉跡

小谷には俗に三大明神杉と呼ばれる大杉があったが、親の原の大杉は殊の外大きくて目通り15メートル近い巨樹であったという。明治末に伐り出されたという。他に石原の白山社の大杉、中土大宮諏訪社の御神木。

千国宿
慶長年代（1596～）から明治二年（1869）まで260年間千国街道を厳然として押さえていた松本藩直属の口留番所。飛ぶ鳥も落とす勢力で君臨していた。番所通過の塩荷から一駄につき大枡二升を徴収したという。千国は坂のまちである。城峯を背に南は親沢の麓、東は姫川渓谷を望む地形は番所を設けるにはうってつけの地であった。千国には「牛の鼻息で飯が煮えた」という言葉がある。北からの牛、南からの馬、双方が入り乱れて賑わったという。周辺地域に影響を与えたものとして盆・暮の「市」の成立が注目される。暮れには廿日市、二十五日市（勘定市）があった。番所の木戸の北は糸魚川の商人、西は大町の商人が店を出した。今は番所や塩倉はなく、往時を偲ばせる善光寺道口の城基式の石垣のみ。



塩の道・千国街道

千国越え

（親の原～香樹～千国宿～大別当～雨中～和平～下里瀬）
（文責・田中）

小谷三宿

松本・糸魚川間の千国街道には十三宿を数える。小谷には三宿があった。三宿以外にも本街道、三坂峠道には大なり小なり間の宿的な家があってそれは小谷全域に及んでいる。

千国宿。盆・響の市には元町から横溝まで街道を挟んで六十もの店が並んだという。政治的に経済的にも姫川谷の中心で、松本藩の重要な「千国口留番所」を設けたことにあった。**来馬宿**。大綱宿と千国宿の中間に位置する。明治四十四年八月の浦川上流禊田山大崩落で壊滅的な被害を受けた。災害時までは「来馬田圃」と謳われた美田も埋まり、茫々たる風景に一変。昔日の面影はない。

大綱宿。信州の北辺の位置にあり、北は横川、西は姫川、南に真那板山を擁する隔絶された地形をもつ。江戸初期頃まで内陸への塩等の輸送コースは三坂峠越えが主であったが、享保以後（1716～）大綱峠道に変わったという。交易上、単なる荷継ぎだけでなく、塩倉や賄宿の宿としての役割を負う必要があった。

紀行文（姫川筋の様子）

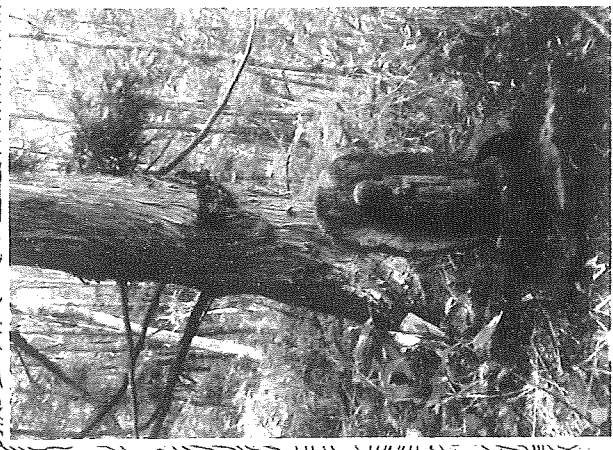
天保十一年（1840）江戸の俳人田川鳳明は大綱峠を下って千国街道の様子記している「・・・千国といへる所迄行けるに大町といふまでの間泊りなし。牛士共の牛牽きながら一夜を明かすあやしき小屋あるのみ。高山は出離れながらただどしき山路の凹凸辛うじて夜道をふむ・・・此の山間在々迂迫にして耕作の地乏しければ専ら養蚕もて専業とすとかや。ここに感ずべきは山中の在々人物の淳朴えもいわれず、貧賤をにくまず、己々が恒を守りて泰然として心を動かさず・・・」。村人の純朴さに感じ入ったという。

二十三夜塔

村々には大概あるもので、月待ち供養に集まった人たちにより造立されたもの。主として女性の集まりで月の出を拝しながら一晩お籠りしたものだという。本尊は勢至菩薩。陰曆八月二十三日（陽曆では九月下旬）に上る下弦の月は殊の外美しいという。

「千国」の名の由来

諸説があって明らかではない。行政範囲は時代によって変化したたであるうが、古代「千国庄」と呼ばれた時代は、現在の小谷村・白馬村地方の全域を支配していたのではという。



千国諏訪神社

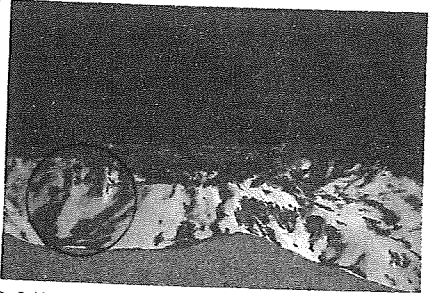
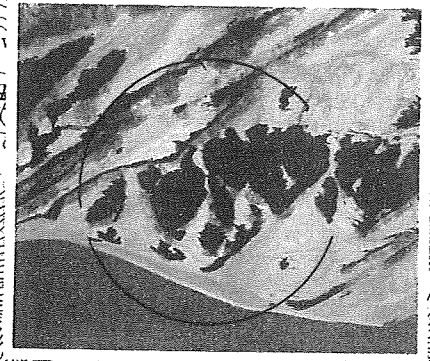
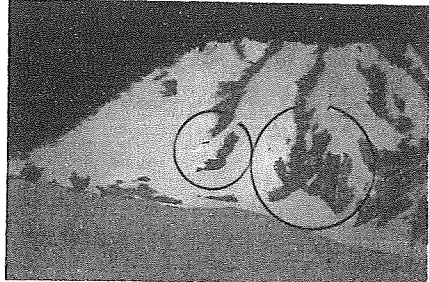
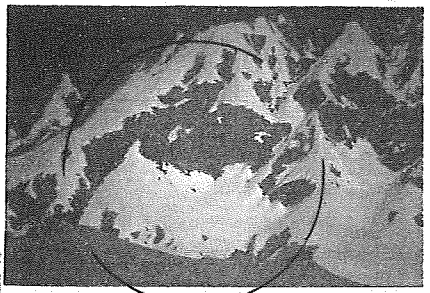
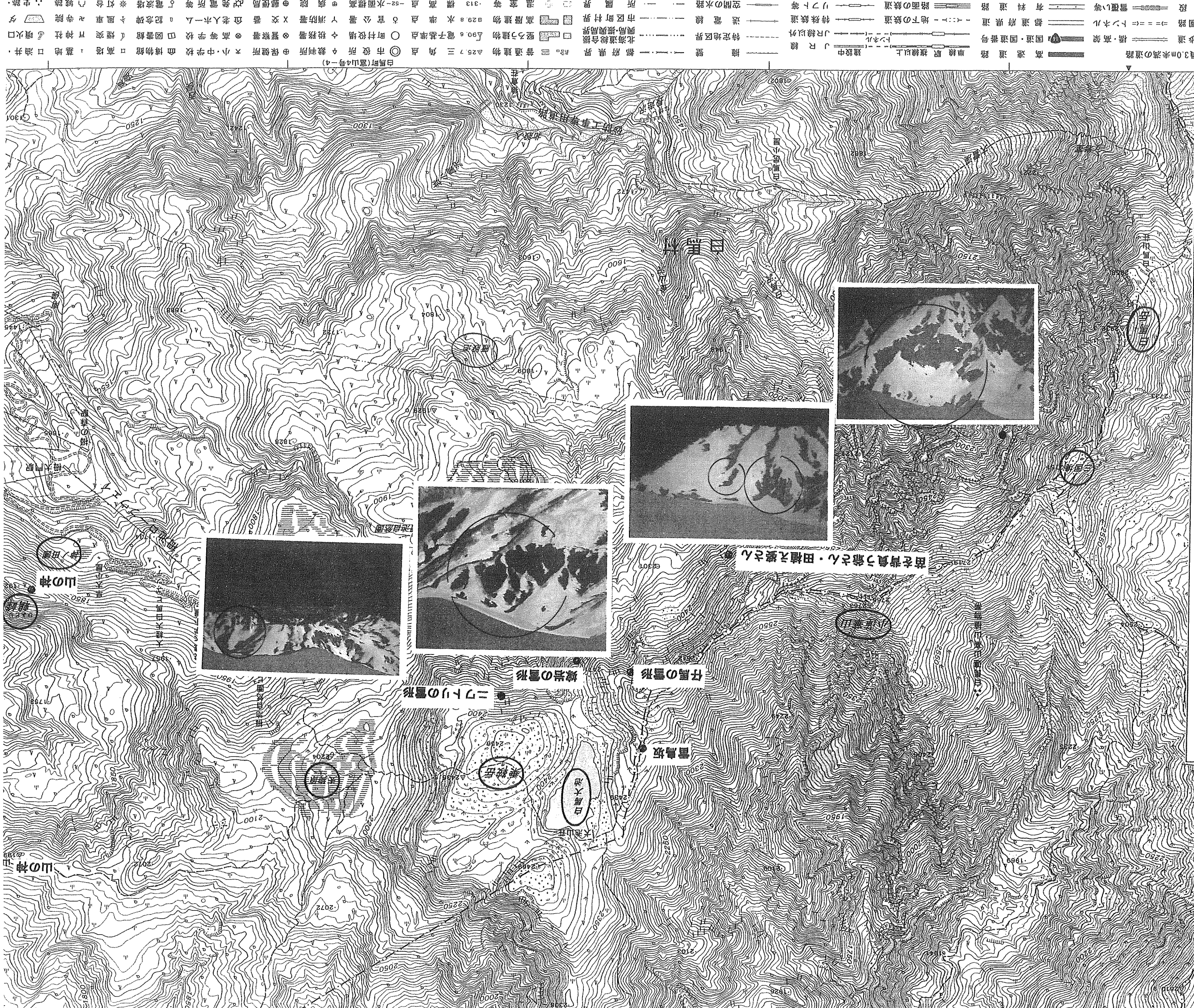
宝物に天長五年（828）銘の「薙ぎ鎌」。外からは拝観できないが本殿は大隅流の宮大工浅川豊八の作品。棟札に寛政二年（1790）。本殿を支える基礎は高遠石工の作。盛夏七月のケケッコ祭り。九月のササラ祭りがある。

源長寺

開創は天元元（979）「安和の変（969）」で千国に流された田原千国が開基となって黒川郷に建てたと長玄寺であるという。天正元年（1573）千国郷の現在地に慈眼山源長寺と号し開山。明治初年廃仏稀釈で廃寺になっている。



天狗原・白馬大池・小蓮華山
 村の奥山に聳える小蓮華山から白馬乗鞍岳への山塊には、伝説と厄書を払うための里人の山岳信仰に結びついた聖地。
 明治も半ば、イギリスの宣教師ウエストが白馬岳の登頂を終えて松本へ向かった折、「千圓」といって小さなお金が別れて蓮華温泉に向かっていた。温泉へは十ヤルほどあるがあまり人が通らない道である。それは、途中の**天狗原**という原野に半分童で半分人間の怪物天狗が隠れ棲んで知らぬ旅人を待ち伏せしているという迷信があるからです。明治の頃まで、**大池**は雨乞いの神を祀る聖地として崇められていた。足を踏み入れると、けちち=飢饉になると信じられていた。
 (1801) 山頂に大日如來の石像が祀られてからのこと。別名「風切地蔵」。落倉高原の風切、折山峰の風切地蔵は一直線上に並び、今も巖の隙、吹き降ろす風に行く手を遮られ、吹き降ろす風に行く手を遮られることもある。山頂の巖剣は昭和二年白馬岳神社信仰家で祀られたといふ。**三國塚**には天正二年(1574)源長寺の開祖河光和尚が地蔵菩薩を刻んで祀ったものだといふ。昭和のはじめ、山奥内人が発見し際ろしたというのが行方不明。



田を背負う娘さん・田植え樂さん

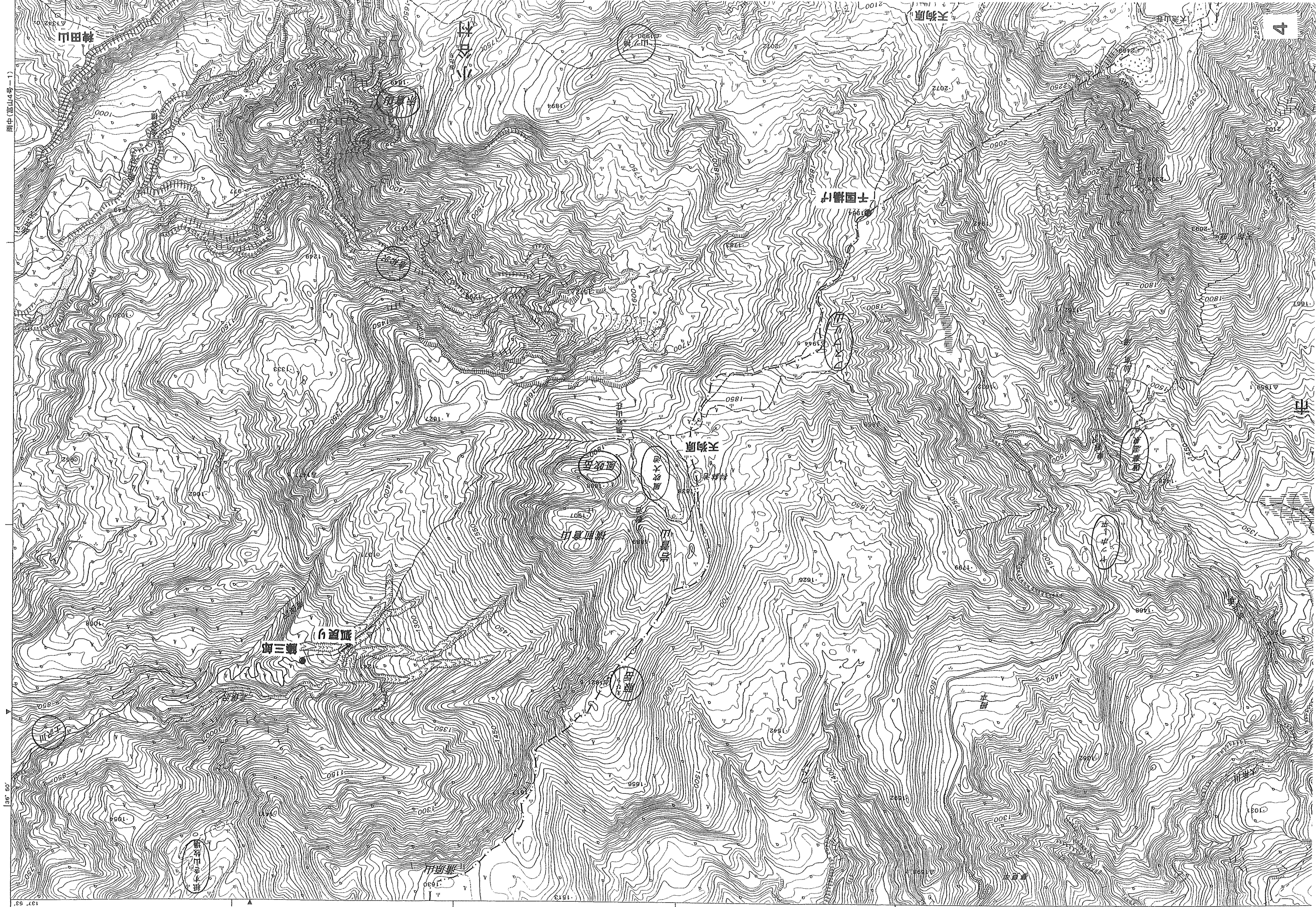
仔馬の雪形

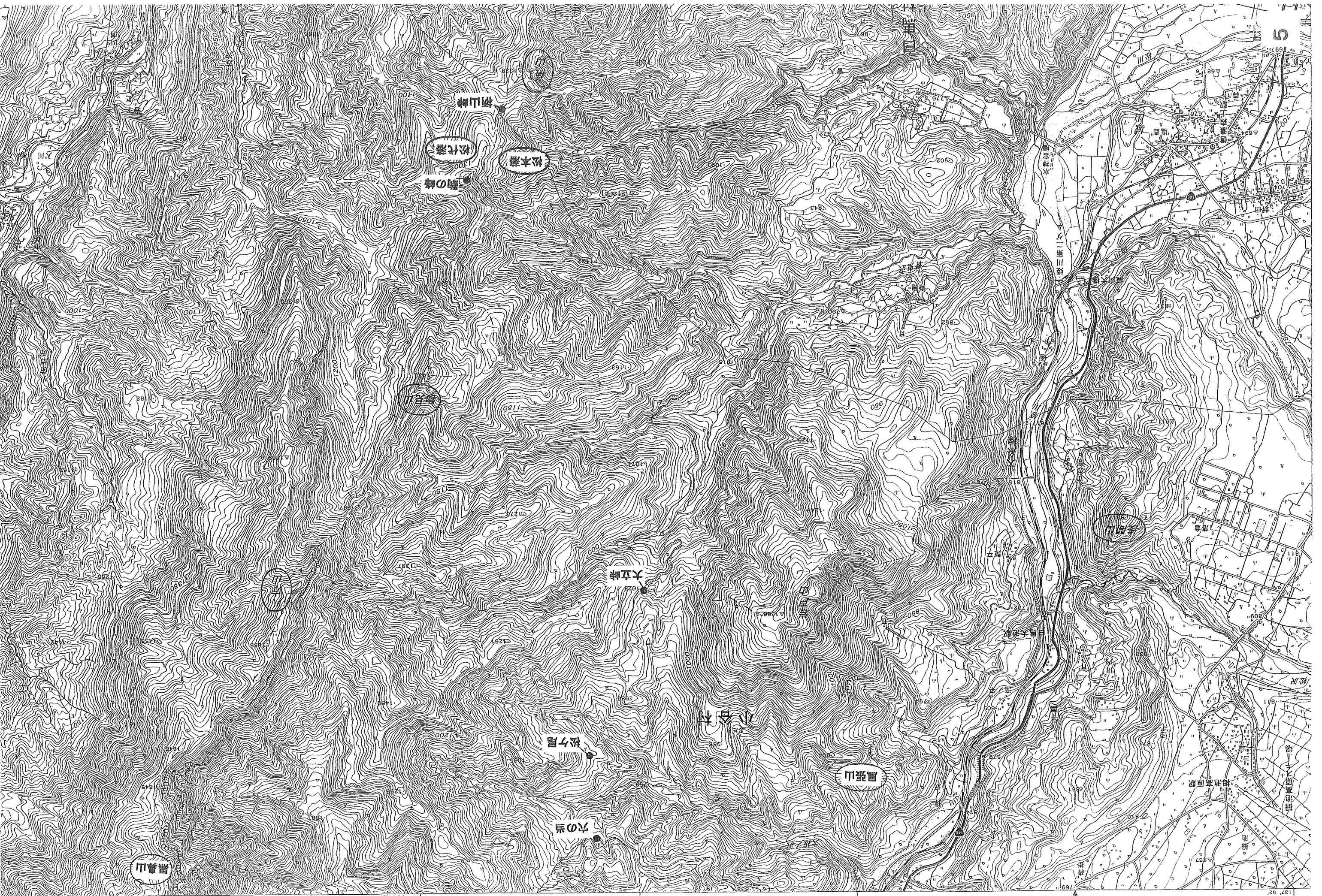
乗鞍岳の雪形

二ツツリの雪形

山の神

山の神





黒鼻山

穴の当

松ヶ尾

小谷村

風張山

大立峠

松代藩

松本藩

駒の峰

桐山峠

【塩の道・千国街道】

石坂越えを歩く

下里瀬～池原～穴畑～石坂～
松ガ峯～沢入～来馬～下寺

文責・田中省三

旧来馬宿跡
今では茫々たる河原に変じているが、明治44年(1911)の稗田山の山崩れで集落は壊滅。今も20メートル地下に「来馬宿」が眠っている。往時宿場を千国街道が南北に通っていた。小谷三宿の一つで諸荷物の継ぎ立て場、盆市、幕市、馬市などで賑わったという。「来馬の美田」と謳われ、豊かな田園地帯であったという。まさに「蒼田変じて河原」となつて106年が経つ。

西方堂

西方堂の一つの由来がある。「帰命尽十方無碍光如来」と記された親鸞直筆とされる掛け軸がある。全国に七幅確認されており、いずれも九十才の長寿を保つた親鸞の最晩年のものだという。永禄年中(戦国の頃)の火災により名号の上部「帰命」を失っている。さらに佐々成政一行の「ざら峠越え」の折、家来の松沢新助が病に倒れたため大町市野口で成政と別れた。新助は親鸞直筆の掛け軸を持って来馬の庵に住んだが当地で亡くなったという。信助の亡きあと従者が霊を弔い掛け軸を安置してこれを西方堂としたという。

小谷の人々は人情に厚く気性が良い
江戸後期江戸の俳人田川鳳朗は街道を旅した折小谷の人々を評して「此の山間在々迂迫(うはく)にして耕作の地乏しければ、専ら養蚕もて専業とすかや。ここに感ずべきは山中の在々人物の淳朴えもいわれず、富貴を羨(うらや)まはず貧賤をにくまず、各々が恒を守りて、泰然として心を動かさず。万事閑易にして奢(おごり)を知らざるは実に僻地の人民幸にして神代の遺風をうしなはざらん」と尊し。石坂の賽の神近くの「溜水」茶屋に泊まった鳳朗の目には村人の純朴さに感じいったのであろう。

排仏棄釈を逃れた寺院のひとつ。県下では数の少ない善光寺式阿弥陀三尊像(中尊阿弥陀如来立像、勢至菩薩立像、観音菩薩立像)を安置している。鎌倉時代後半の制作といわれ、県宝指定。かつては旧来馬宿に総門があって、二百数十の石段を上ったというのが、山門に立つて前面に広がる、悲慘を極めた歴史を偲ぶだけである。またこの寺にはまつわる「金山和尚事件」があったという。

豆平諏訪神社

大北地方でも古い方に該当する「菊散松垣双雀鏡」(鎌倉時代初期の制作と言われる)が所蔵されている。

森岡社

塩の道から二十メートル上部が森岡社跡。かつては小さな境内で草相撲や芝居が催されたという。

帷子石

戦国の平倉城主日向守飯藤盛春や旅人が濡れた帷子(かたびら)をこの石の上で乾かしたという言い伝えがある。



松ヶ峯
峠から浦川上流4k程に屏風のように立ちだかる稗田山の大崩跡を一望でさる場所。明治44年8月8日未明突如として起こった日本の三大崩落の一つといわれる大惨事の爪痕。流れ下った大土石流は姫川を堰止め、さらに大石が松ヶ峯を越え雨のごとく来馬宿側に降つたという。今も尾根には累々と巨石があつて往時を偲ばせてくれる。

幸田文 文学碑

全国の崩れ地取材した女流作家幸田文は昭和52年7月に稗田山の崩壊と浦川を見聞され「婦人之友」に掲載。歳月茫茫碑文は「崩れ」から抄出した。「災害の話を聞きながら歩けば感無量だつた。道のべに生い茂る夏草は鮮やかに青く、まことに歳月茫々の思いにうたれる。稗田山はちやうどこの真正面というので見えないと承知しながらも目をこらせば、霧の粒が砂子になって浮動する。そんな中で鶯が近々と啼いて、激しい川音をそらす。幸田文「崩れ」よ里

石坂
稗田山の大崩れで被害に会い往時の面影はないが二十軒ほどの集落に店が二軒あつたという。街道の時代行き来したボッカ達や牛方等への接待が収入に見合つたということであろうか。

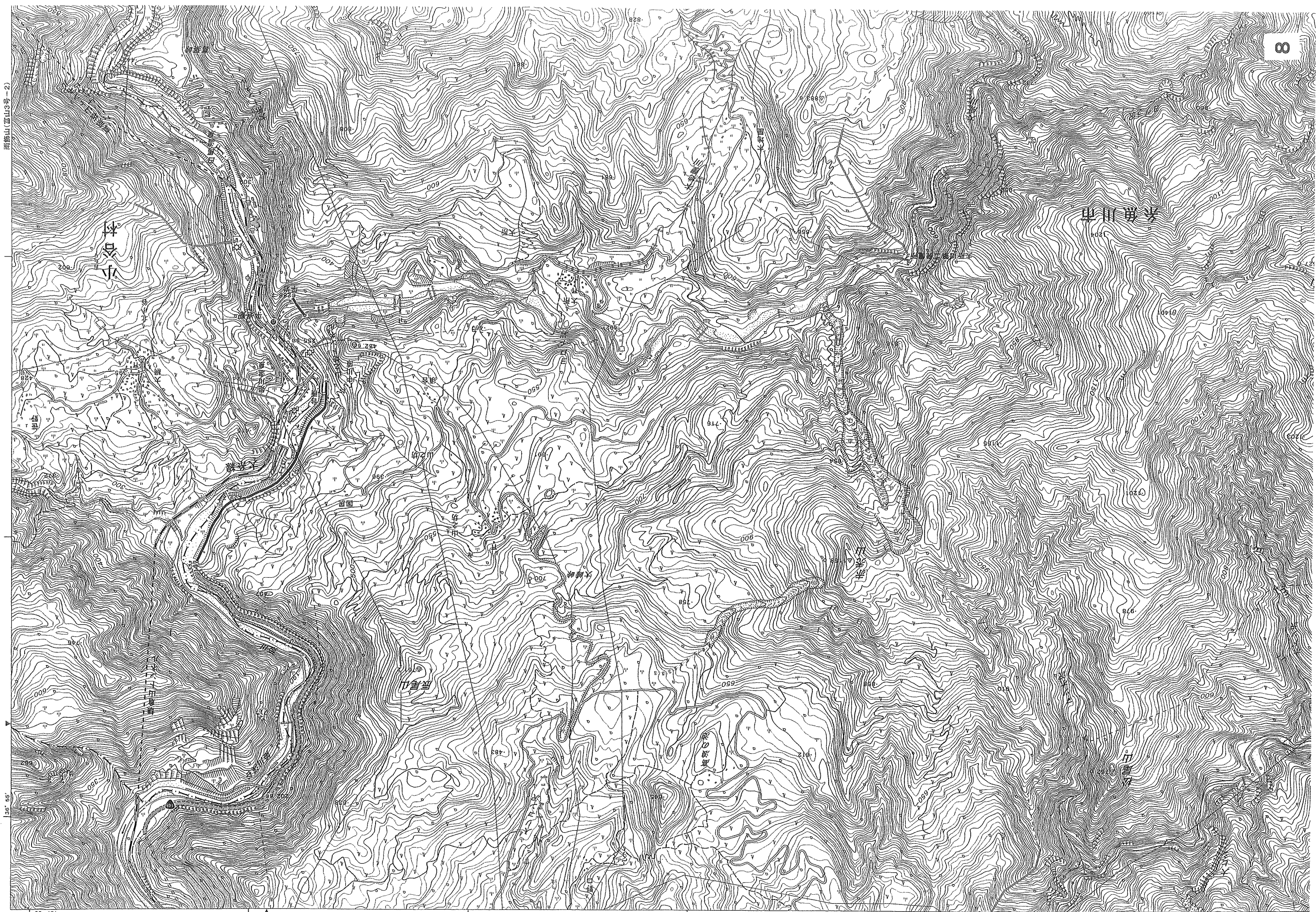
アスベ

「ふすべ」という大難所在り。少しの所也。下は姫川という大河、上は切り立たること石山也。雪中に雪なだれ折リ々々有りて人馬圧殺さる。雪時分は通り難き所也。」瀬下敬忠「千曲の真砂」(宝暦三年・1753)今も街道の時代を彷彿とさせてくれる難所。心して横切る場所。

溜水
街道時代、塞ノ神の峠南口に茶店を兼ねたボッカ宿が2軒あつたという



塩久保

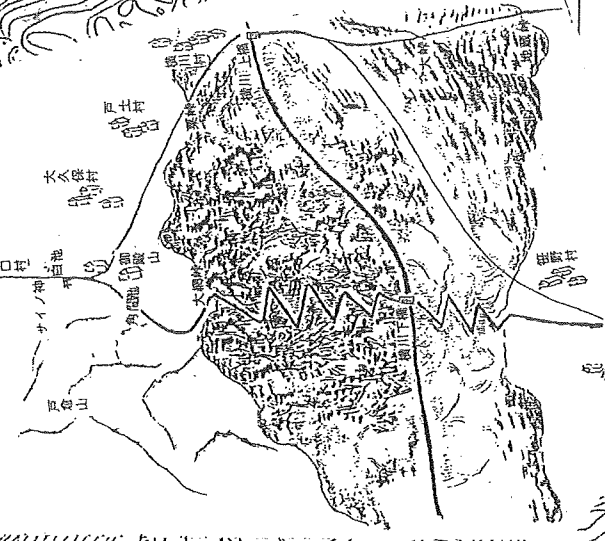


塩の道・千国街道

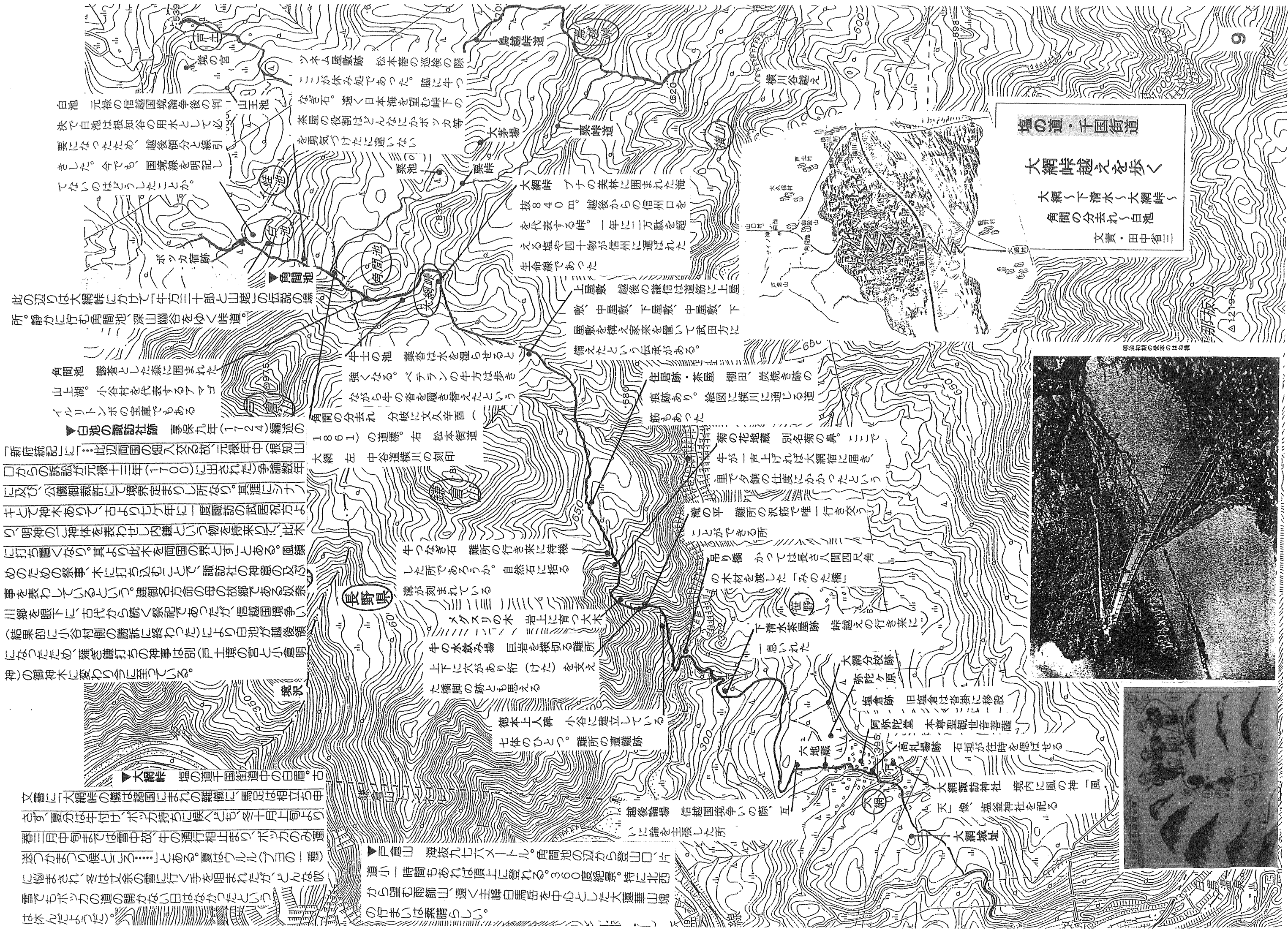
大網峠越えを歩く

大網〜下清水〜大網峠〜
角間の分かれ〜白池

文責・田中省三



明治初期の塩道の様子



白池 元禄の信越国境論争後の判
決で白池は根知谷の用水として必
要になったため、越後領分と線引
きました。今でも、国境線を明記し
てないのはどうしたのか。

此の辺りは大網峠にかけて「牛五十三郎と山姥」の伝説の場
所。静かに佇む角間池、深山幽谷をゆく峠道。

▼白池の諏訪社跡 享保九年(1724)編述の
「新府統記」に「此辺画国の烟入交る故、元禄年中(根知山
口からの訴訟が元禄十三年(1700)に出された、争論数年
に及び、公儀御裁許にて境界定まりし所なり。其涯にシナ
キとて神木ありて、右より七十年に一度諏訪の武居祝方よ
り明神の御神体を表わせし内鎌といつ物を持来りて、此木
に打ち置くなり。其より此木を画国の界とす」とある。風鎮
めのための祭事、木に打ち込むことで、諏訪社の神意の及ぶ
事を表わしているといつ。建御名方命の母の故郷である奴奈
川郷を眼下に、古代から続く祭祀であったが、信越国境争い
(結果的に小谷村側の勝訴に終わった)により白池が越後領
になったため、雑沓鎌打ちの神事は別戸土境の宮と小倉明
神の御神木に変わりに至っている。

▼大網峠 塩の道千国街道中の日置。古
文書に「大網峠の嶺は諸国にまれの難嶺、馬足は相立ち申
むす、夏分は牛付、ボツカ持ちに候ども、冬十月上旬より
春三月中旬までは雪中故、牛の通行相止まり、ボツカのみ運
送つかまつり候と云ふ……」とある。夏はワルル(雨)の一種
に悩まされ、冬は女糸の雪に行き手を阻まれたが、どんな吹
雪でもボツカの道の開かない日はなかったといつ
は休んだよつた。

ツノム屋敷跡 松本藩の巡検の際
ここが休み処であった。脇に牛つ
なぎ石。遠く日本海を望む峠下の
茶屋の役割はどんなにかボツカ等
を勇気づけたに違いない

大網峠 プナの美林に囲まれた海
抜840m。越後からの信州口を
を代表する峠。一年に二万駄を超
える塩や四十物が信州に運ばれた
生命線であった

上屋敷 越後の謙信は道筋に上屋
敷、中屋敷、下屋敷、中屋敷、下
屋敷を構え家来を置いて武田方に
備えたという伝承がある。

牛土の池 藁沓は水を濡らせると
強くなる。ベテランの牛方は歩き
ながら牛の沓を履き替えたといつ

角間の分かれ 分岐に文久辛酉(一
八六〇)の遺標。右 松本街道
大網 左 中谷遺横川の刻印

牛つなぎ石 難所の行き来に待機
した所であろうか。自然石に括
弧が刻まれている

メグスリの木 岩上に育つ大木
牛の水飲み場 巨岩を横切る難所
上下に穴があり桁(けた)を支え
た橋脚の跡とも思える

徳本土人碑 小谷に建立している
七体のひとつ。難所の遺難跡

大茅場 粟峠道

住居跡・茶屋 棚田、炭焼き跡の
痕跡あり。絵図に横川に通じる道
筋もあった

菊の花地蔵 別名菊の鼻。ここで
牛が一声上げれば大網宿に届き、
里で夕餉の仕度にかかったといつ

滝の平 難所の沢筋で唯一行き交う
ことができる所
吊り橋 かつては長さ八間四尺角
の木材を渡した「みのた橋」

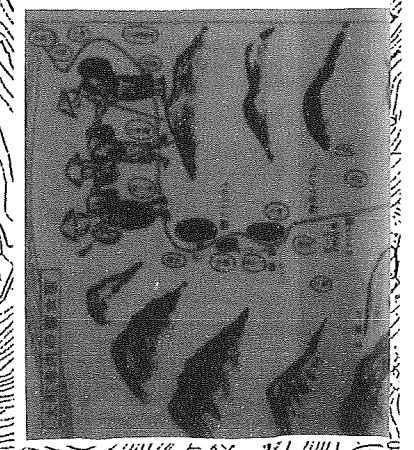
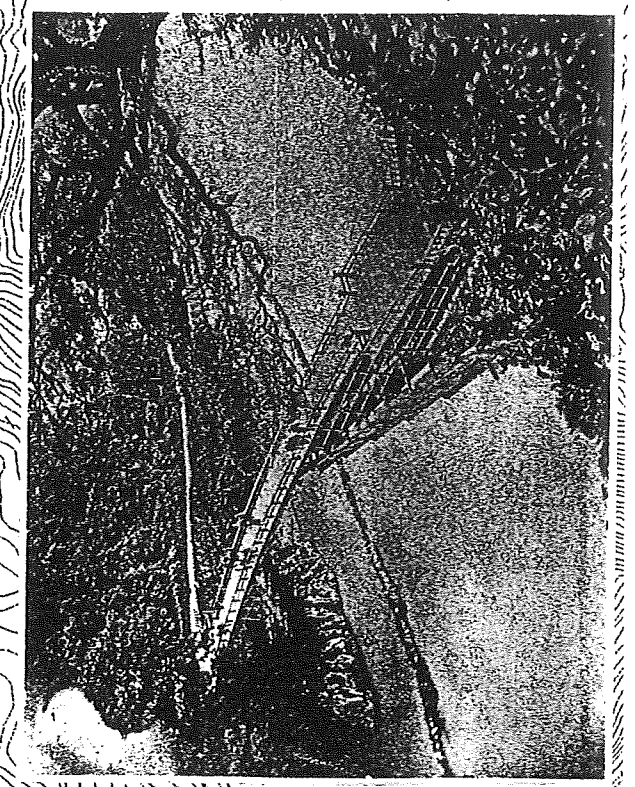
下清水茶屋跡 峠越えの行き来に
一息入れた

大網分校跡
阿弥陀堂 本尊聖観世音菩薩
高札場跡 石垣が往時を偲ぼせる

大網諏訪神社 境内に風の神「風
天」像、塩釜神社を祀る

越後論場 信越国境争いの際、互
いに論を主張した所

▼尺倉山 海拔九七六メートル。角間池の辺から登山口、片
道小一時間もあれば頂上に登れる。360度絶景。特に北西
から望む雨師山、遠く主峰白馬岳を中心とした大連華山塊
の行まは素晴らしい。



大将陣 館山の東南の平坦地に武田信玄の武将山県昌景（家康も信長も恐れたという武田最強軍団）が平倉城主飯森日向守盛春を攻めるために陣を張ったところだといふ。

宮本橋の「みのだ」について 宮本橋は年に何回も大水のたびに流されると、近くの人に手ごろの大木がなくなってしまう。流されたみのだは下流にいつか拾い上げまた使用することになる。流されて幾日もたつと、下流の者たちにひらわれても仕方がないのが昔の不文律であった。

宮本橋 橋場という地名を残す所に架かる宮本橋。姫川下流にはいくつもの大事な橋がある。過去大水や地震等の災害で落橋することは度々であった。そのたびに左岸右岸沿いの塩の道を使い分けた。15間近い巨木が必要で流されないように一方に穴に麻縄を通し、岩に括り付けたという大岩が「燕岩」という地名で残る。橋場という地名も。

鷹潭岳の山名の由来

トウは此の山がこんもりしたトーム型をしているということ。そして、この山から流れる川に津がある。

平倉城落城の後、武田晴信は高札をだしている。 落城の年、弘治三年（1557）十月九日に「高札」を出す。「軍勢 甲乙（誰れ彼れなしにといふ意）人等千国谷中に於て 乱暴狼藉を停止し訖んぬ若し此の旨に背く輩に到つては罪科に処すべきものなり 仍件の如し（古文書は村の有形文化財）」

土谷諏訪神社 養老二年（718）下諏訪社から勧請奉斎したといふ。宝暦元年（1751）大町の名工金原氏により建立。拝殿の木鼻は鎌倉期の手法を伝えているといふ。古い薙ぎ鎌が宝物。

ガ二原 牛の沓をガ二（雙）といふ。沓を備えておくところを「ガ二掛け」。古来の名残りをもつ地名。

御頭岩 信越国境の御神木に打ち込まれる「薙ぎ鎌打ちの神事」の鎌を奉持する、諏訪大社の大祝一行がここで労を休めたといわれる諏訪信仰遺跡。

小谷村には構造的な盆地が発達していない

姫川谷は狭い谷のままになっていて、洪水や崩壊の多い谷筋のため、古代から交通を阻む難所が多い。それを避けるために塩の道は段丘や尾根道に造られた。集落も段丘地形に発達している。

土谷堰 安政七年（1860）八月、土谷村中総出で8kmの堰を一週間で開削したといふ。畑作や焼き畑に依存していた百余戸の村人は三十町歩の稲作に浴した。

史跡・平倉城址 弘治3（1558）年、武田の軍勢に攻め落とされた標高712mの山城。城主は飯森十郎盛春と伝える。中谷東の旧玉泉寺境内にある史跡「飯森日向守春盛墓所」文化3（1861）年以前にあつた墓所を新しく建立している。「新府統記」によれば、応永年間（室町時代初期）の城主飯森山城守盛照の何代目かが春盛であると記されている。

道路普請の苦勞のこと（古文書から） 「小谷六ヶ村の儀、山川多く御座候。宮本橋・浦川橋・中谷川橋・土谷川橋・横川上下の橋まで七橋に大分の人足にて毎年掛来り候。三坂峠道・大網峠道・千国より虫尾道・ふすべ・湯のはな難所へ五ヶ所の普請は又難産、毎年作り来申し候。其外千国境より戸土・横川・白池御国境迄往來の道筋十里余の普請教多御座候。右普請小谷小郷にて、毎年普請仕り候へば、春作、節をはずし申候故、不作仕り、外村にすぐれ、困窮仕り候。

和平の分かれ 姫川左岸を行く江戸時代のメインルート塩の道と宮本橋を渡つて古代に遡る右岸沿いを行く古道との分岐。

石原白山社の大杉 小谷明神杉のひとつ。目通り12mの巨樹。大きな洞をもち、祭事で雨になると洞を使ったといふ。口碑に諏訪明神が越後から諏訪の地に入る前に植えられた木がこの大杉であるといふ。

腰掛杉 目通り5m、高さ37mの山杉（熊杉）。地上20mで枝支が密生して樹冠の形をしている。村人は此の奇形態様を「神様の腰掛」と呼んで拝めている。

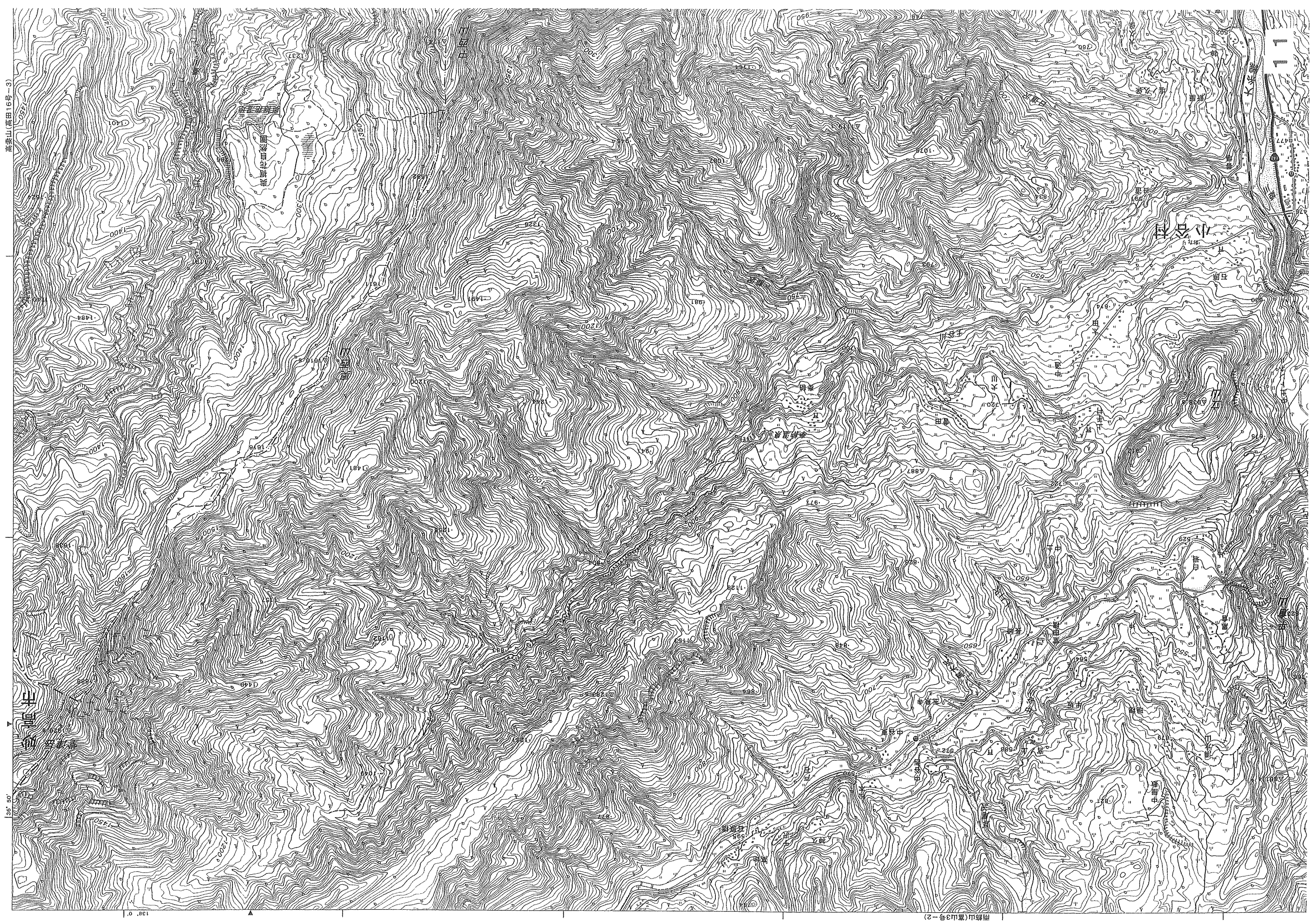
【塩の道・千国街道】

大峯峠越えを歩く

- 和平、燕岩、神平、香場、蟹原、
- 太田、中通、上手村、大峯峠、中尾根、
- 堀越、長崎、市場

文責・田中省三

高峯山(蒲田16号-3)



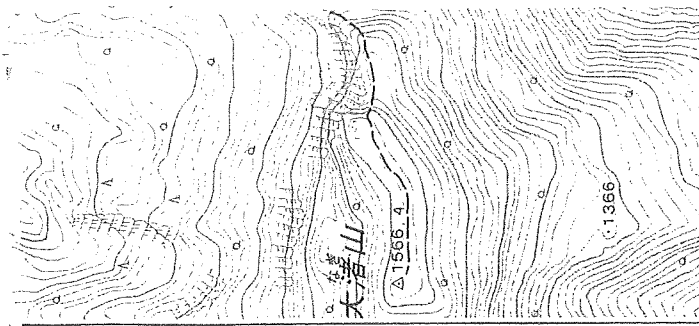
高峯山

36° 50'

138° 0'

高峯山(蒲田3号-2)

11

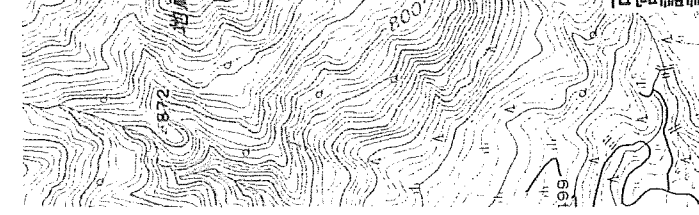


明才堰 明治十二年を端緒に始まった明才堰の工事は中谷川の水源から北小谷の姫川に落とすまで、延長5里余り。巨費を投じた明治初期の一大事業であった。主導者となって計画・実行した横川才蔵は中土村塩の久保の出身。大海川の取り入れ口と、その功を伝える「始於十四年・竣十八年」碑を堰沿いに残す。

小谷という地名は、その源をどこに発しているのか
 一説に万葉の中に滝の事を「垂水(たるみ)」と言っているから「小垂」(小さな滝)からきているのではないかと。一説に麻は小谷と関係が深い。「麻垂」(おたり)からではないか。当時の換金作物のひとつ。かきそにして家の周りに垂らしておく光景から名づけられたのではないかと(杉本好文)。三説に「たる」の語から察して、崖絶的な深い溪谷をさしているものと思われ、中谷が本郷ではないかと(志茂樹)。四説に小谷の谷は宛字。タリは断崖状になっている深い谷の地形をあらわしている。雨の時はかりは滝になるような場所を中部日本ではこう呼ぶ(谷川健二)。



【塩の道・千国街道】
高町越えを歩く
 市場、塩の久保、宮の上、高町、埋橋、鎌上平、深原
 文責・田中省三

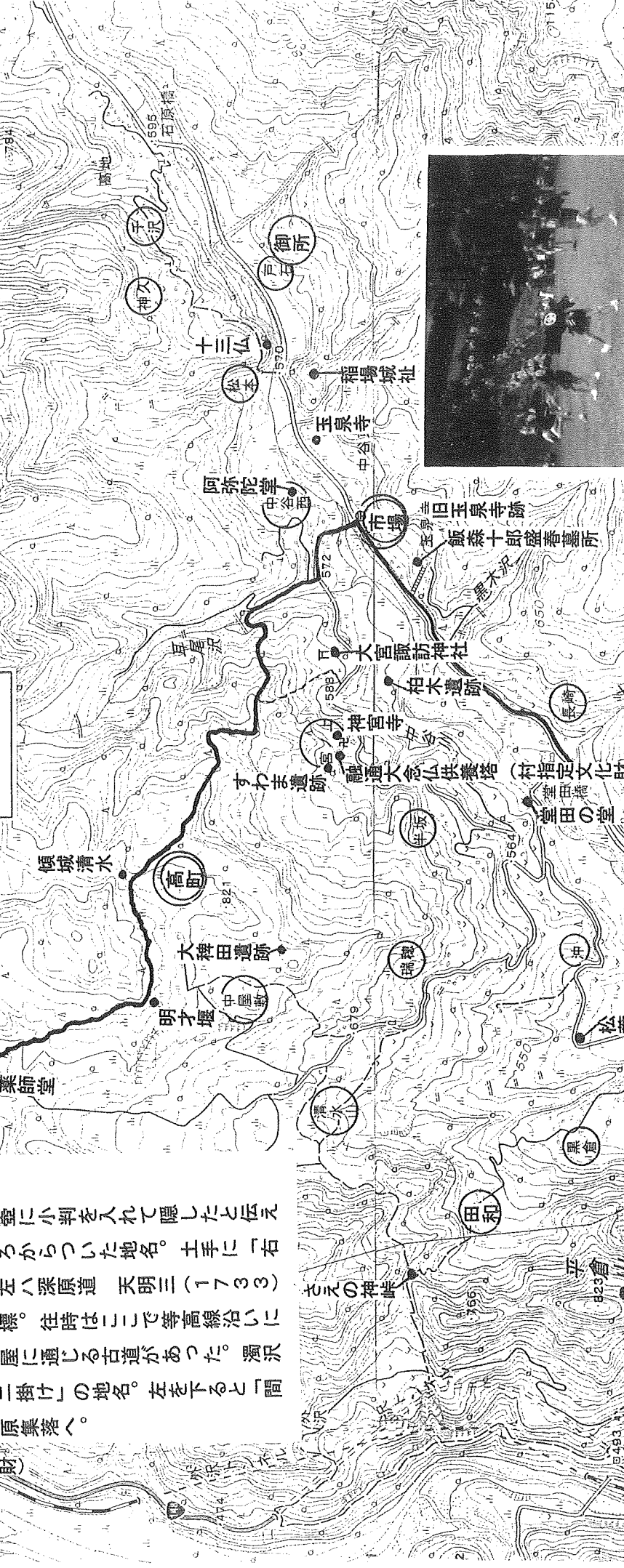


奇怪な雑鎌 考古学者・藤森栄一による雑鎌への推論の大意は、古代(奈良時代)までの実用の鉈鎌(カッパライ鎌)が鎌倉時代頃になって諏訪信仰の開拓神や蛇体信仰と結びつき、奇怪な雑鎌が薄刃のない仮器の姿を表したのだらうと述べている

大宮諏訪神社 旧小谷七ヶ村の総鎮守とされる古社。旧社地は西北500mの「すわま」というところで、社殿を造らずに神の霊地として神を招き神祭りをしていたと伝えられている。文亀年間(1501~1504)に地すべりの為現在地に遷したという。本殿の建立は棟札から元和五(1619)年の建立。「すわま」から出土したという古代「雑鎌一振」(村指定文化財)。奴の唄綴り91枚(村指定文化財)。奴踊り、狂拍子踊り(県指定文化財)。社叢は天然記念物。七年に一度信越国境の御神木に打ち込まれる「式年雑鎌打神事」は県無形民俗文化財。諏訪神の象徴とされる雑鎌、昭和十八年に復活して以来、今日に及んでいる。

すわま 旧大宮諏訪神社の鎮座地であった。諏訪神を祀る以前は、峠(埋橋付近・地蔵峠や旧三坂峠)が遠望できることから、すわまはいわゆる坂本神社ではなかったかと、志茂樹は述べている。

高町 古い宿場跡といわれ、付近から(大榑田遺跡)黒曜石や打製石斧が出土している。近くに「傾城清水」という名称の湧水。江戸時代、群奉行が六年に一回の土地の検分の際、傾城清水付近で憩われたという。



市場 古くからの千国街道沿いの要衝の地として「市場・塩の久保」の名を残す。中土は中谷村と土谷村とが合併した名称。市場を中心に西南は平倉城・曾田城・玉泉寺、東北は神宮寺・大宮諏訪神社・稲場城に囲まれた佇まいは古来より小谷の「本村」であった事を彷彿とさせてくれる。越後から北信濃への歴史・文化の通風口の一つであった姫川谷。戸土高原から三坂・地蔵峠を越えて、埋橋・高町を経て市場に出て安曇野に向かう古道に伝えられる糺塩の話(糺信は戦いは弓箭にあり米塩にあらず)。古代ヒスイや和田峠の黒曜石が通った尾根筋の道筋は、古代への郷愁を感ぜさせてくれるのに十分だ。



神宮寺と融通大念仏供養塔 神宮寺の始まりは八世紀初頭であるという。文亀元(1501)山腹崩壊して現在地に再建今日に至る。元は大宮諏訪神社と並んでいたのではないかと。現在は高野山金剛峰寺の末寺。境内に融通大念仏供養塔。かつては、中谷最奥の葛草連集落に建立されていたが、集落陸村後関係の深い神宮寺の地に移されたもの。向かつて、右肩に「文政(1830)十三天ヲノ七月吉日 以下十字の読解不明の文字サク」が刻まれている。書家の故宮島潤子は「神代文字」(アヒル文字)の変形と結論づけ、「神に祈りを捧げる人間にのみ通じる宗教的な文字で「サク」なる女性が主導的な役割で、神に奉げた祈りの言葉」だと言っている。全国的に珍しく、初めて世に紹介された村の指定有形文化財)



鎌上平
 昔、豪族が壺に小判を入れて隠したと伝えられるところからついた地名。土手に「右ハ越後道 左ハ深原道 天明三(1733)癸卯年の道標。往時はここで等高線沿いに退分・番小屋に通じる古道があった。濁沢近くに「ガ三掛け」の地名。左を下ると「間の谷」の深原集落へ。

平倉山城址
 室町時代後期(1532)平倉山城主 飯森十郎盛春により玉泉寺が開創されたという。弘治三(1558)年七月五日武田方に滅ぼされ、討ち死にした盛春の遺体は菩提寺である玉泉寺境内に村人によって葬られたという(首級は持ち去られたという)。先の神城地震で現在地に墓石を移し改葬された。(平倉城址と墓所は村の指定文化財)

信州と越後を結ぶ塩の道の役割は何であったろうか

一、生活面として、物資の交流に利用されたということ。塩、四十物（魚）を主体に、高麗の金物、輪島漆。九谷焼、九州の唐津焼・・・。信州からは麻・苘・大豆・綿・炭・楮・くれ板・・・が主として運ばれた。

一、文化面として、峠が通風孔になって他地域の文化や信仰の交流に役立ち、野路に佇む野仏や寺社をすることができた。

一、政治面として、大名行列こそなかったが、松本藩役人の往来、藩と直接関わりのある年貢米・塩・漬けワラビの運搬など。姫川谷・安曇に住む人々の暮らしに重要な役割を果たした。

番小屋跡 白井沢を眼下に尾根上の層に、十一面観音菩薩。千国口留番所の支所的作用を果たした。険しい峠越えを終えて、息ついた所だろう。追分・ガ二掛を経て銭上平に通じるかつての道筋は今は廃道。一日の労を休めた深原集落を経由する道に変わった。

地蔵峠（地蔵小峠とも） 地蔵峠の名のごとく平の堂に二体の地蔵様を祀っている。貞享四（1687）の建立というから村最古の部類に入る。地蔵脇の乳房の木（村の指定文化財）とともに、深原・李平の人たちの六月の縁日は賑わったという尊宗的であった。地蔵沢に面したブナのがかりこの巨樹群。文政七（1824）年地蔵平の雪が落ちて李平に甚大な被害をもたらした雪崩以後ブナ・檜の森は今は留山。まさに、民俗の縮図といったところである。

観音堂 小谷難所の一つ。堂に観音像、近くに弘法の水場。牛でさえ難にあつたという。

地団駄・貝の平

武田方と合戦している上杉方が平倉城主。飯森の援護のためにここでほら貝を吹いたが、落城する姿を見て地団駄を踏んだという伝承をもつ。

宇宮諏訪神社（深原） 寛平二（890）年創立という古社。古代、諏訪神の信州入国の神地と伝えられ「羅鎌打ちの神事」の際は、巡行の折り参拝されたものだという。峠越えの無事を祈った「坂本」に当たると想像される。社叢は村指定の文化財。

深原集落 地蔵・三坂峠は昼間越えることになるから峠下の集落は旅人や牛方らにとって大事な足たまりになった。牛馬が憩い、他国の文化が伝播され交流の役割を果たした。古老の話「地蔵峠を塩を運ぶ牛は大坂峠を越えるには時間がない。宿をとるために、番小屋を下る明かりや影が堂前から見えただけ」と。

形谷村

三坂峠の名がもたらすもの 古代からの古道であることを証明する小谷の「三坂峠」の地名の意味は大きい。北信に限っても他に、関田トレイル東に深坂峠、野尻湖近くに見坂峠。東日本に集中しているという。大和朝廷による地方支配のための幹線の道だといふ。峠には荒ぶる神がいる。旅人は無事の峠越えのために幣を奉り、祭祀をして通つたものだという。その場所は小谷のどこだろうか。興味が尽きない。享保十六（1671）の古文書に記載された三坂峠の発見で、古代氏族仁科氏は姫川谷を使って大町に定着したことが定説となっている。江戸時代の千国街道とは意味が違ふ。一千五百年も昔の朝廷に繋がる道。小谷村は、信州文化の入り口の役目を果たして来たに違いない。

跡杉坂 地蔵峠道には、弘治三（1559）年夏平倉城落城の際、上杉方の援軍が来たが道沿いに「貝の平」・「地団駄」という地名がある。援軍の到着を告げ励ましたところが貝の平。落城の火の手を見てくやしがつて地団駄を踏んだという。三坂峠を越えて援軍の最後尾がいた所が跡杉。上杉方に関する伝承が多い。

長清水

古道沿いで喉を潤す格好の名水であったが、25年程まえの崩落で埋没。

長者平 広大な長者平には、戦国の頃七十軒もの家があったという。平倉城を落城させた武田勢が余勢をかって北に進出する際、一戦を交え皆焼き払つたと伝えられている。此処の姓は皆一飯森姓だつたというから平倉城主と関係か。姫川から山深い奥地の長者平に何故集落ができ、七十軒も暮らしていったのか。それは、雨飾山や戸倉山の頂上から望む眼下の姫川谷にわけがありそう。

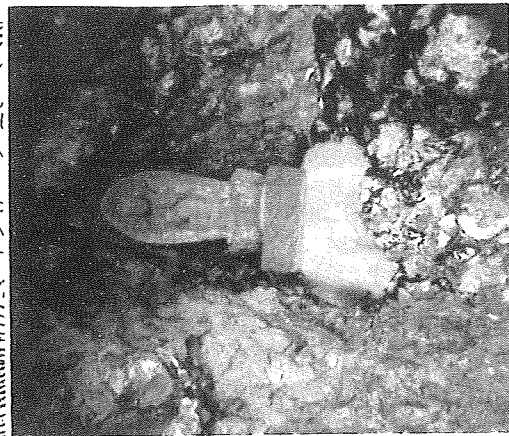
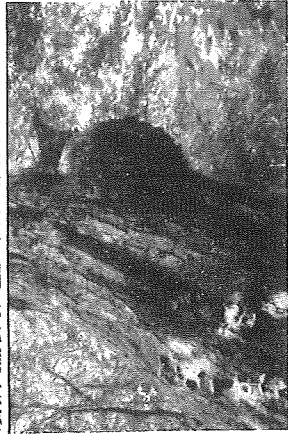
塩の道・千国街道

地蔵・三坂（大）峠道を歩く

深原→阿原→追分→番小屋

地蔵峠→三坂峠→長者平

文貫・田中省三



1,050

1324

1264

1264

1264

1264

1264

1264

1264

1264

1264

1264

1264



明治の初めころ、京都の東本願寺の大柱に横川集落のお宮地籍からケヤキの巨木三本が供出されている。ケヤキの巨木を現地で四尺角にして、鳥越峠を引き上げて根知谷、日本海、琵琶湖を通じて供出したという。大木を載せたソリも大きく根知資料館に展示。横川戸土、根知谷の門徒宗の信仰の深さをうかがえる。当時の帳面「御柱三本、村ヨリ出ストキハ越後国根知谷一同老若男女ノハテマデ御取持ニテ村中ハ申スニ及バズ、大綱李平ノハテマデ、御取持コレアリ、鳥越ヲ引キ揚ルトキハアビタダキ人ニテ難儀ナク引揚ゲタリ」

根知区山口集落から信州に通じた道は四つあった。一つは白池から大綱峠に出て急坂を登り下りして大綱集落に通じる道。江戸時代大綱は継荷改めをしたり松本藩から特別の命を受けて、塩や四十物などは庄屋の番付け印を受けなければ輸送できない仕組みになっていた。その二は鳥越峠に出て横川に下り、大綱に通じる道。横川集落には牛宿は救軒あつて往来が盛んであつたという。その三は横川から三坂、地藏峠を越えて深原、埋橋を過ぎて中谷村市場に通じた道。謙信の義塩の故事の道筋でもある。その四は戸土から観音道標の分岐から雨師山の裾野の大地八百平を横断して湯峠に至り小谷温泉に通じる三里の道。

諏訪明神のシンボルである「鎌倉鎌」を諏訪大社下社から奉持して「戸土境の宮」と「中殿小倉明神」の神木に打ち込む神事が残っている。古くは鎌倉時代ころに遡るといわれているが、かつては白池端の「諏訪の平」の神木に打っていたが信越国境論争以後国境の要の境の宮と小倉明神へも打たれるようになった。明治初年から一時途絶えたが、昭和十八年に復活今に及んでいる。

【塩の道・千国街道】
 粟・鳥越峠越えを歩く
 *長者平・横川・殿行・粟峠・角間の分去れ・白池
 *横川・鳥越峠・鳥越峠・戸土
 文責・田中省三

糸魚川藩山口関所 今は往時の関所の面影はなく石碑が伝えるのみ。関所を通った出入りの塩や四十物などの諸荷物の駄数は安政五年（1858）当時一年間で二万駄（一駄は100kg半一頭に一駄）を越えたという。牛による峠越えは冬は不可能だから無雪期の六か月で計算すると一日平均七十三駄。牛方一人で5〜6頭追いながら峠を越えたことになる。時に街道は文字通り牛の行列であつた。

「戸土」地名の由来
 トド、遠戸であつて、外門の意。信州の最果て、とどつまりなどという言葉があるが、本来の意味は諏訪からの「遠土」で諏訪信仰からの呼び名であるという。（柳田国男説）



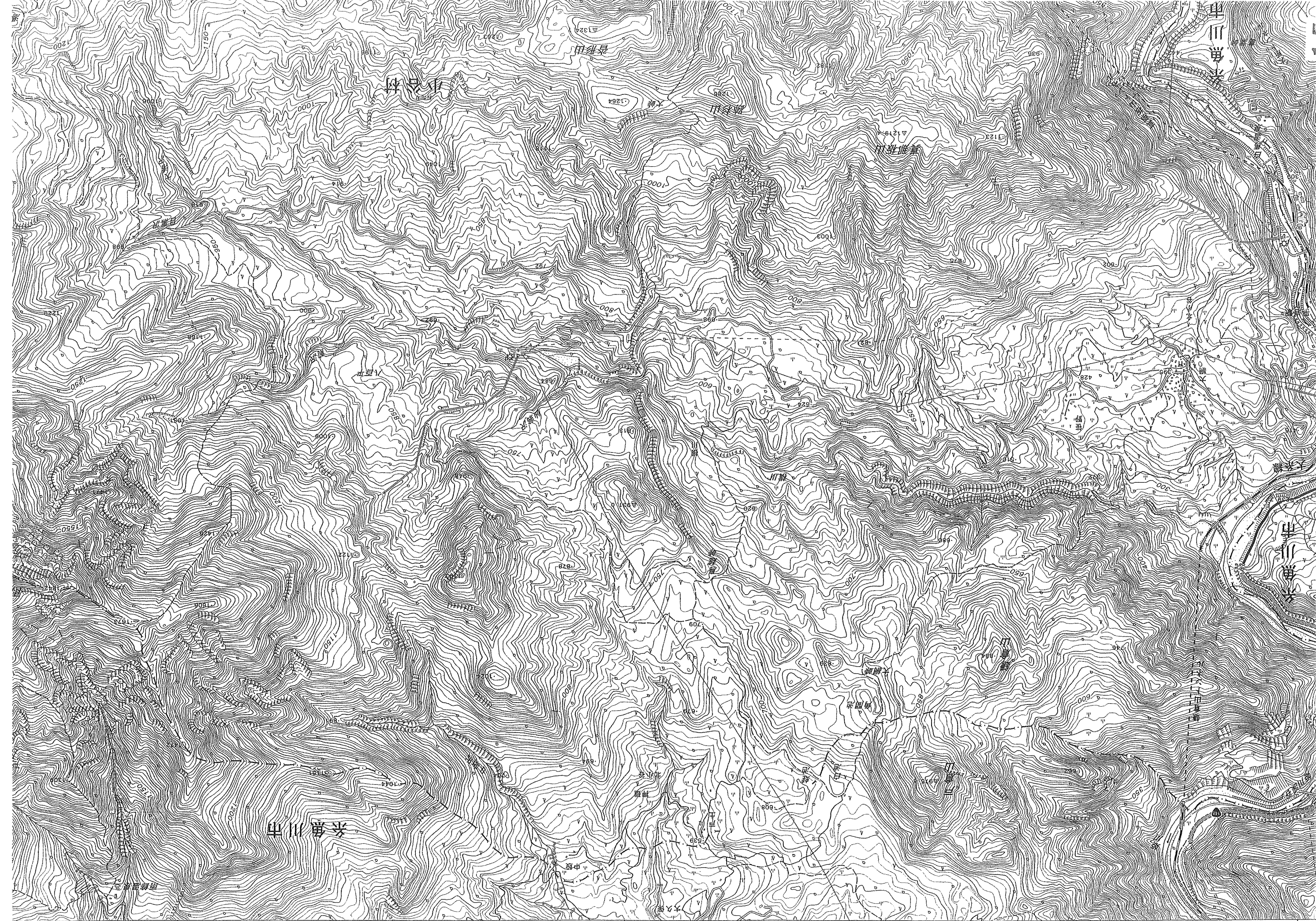
横川・戸土集落の自然環境
 かつての集落の面影はない。村人の生活環境は信州的ではなく越後の影響を強く受けていた。横川集落は姫川から高度差400m、戸土集落は根知谷から高度差400m。姫川から遙か奥地の両集落は迂り動く大地と丈余の豪雪に暮らす宿命を負っていた。今は、雑草に覆われて無住の里に変わったが、古代から江戸時代初期まで越後と信濃を繋ぐ要衝の地であつた。かつては、往来する牛方やポツカが多く、生計が成り立つたという。横川に、「牛ヒトメエは六頭で、ツツカラカシ一儀は十六貫、炭は背中で別所まで、夏は牛方、冬はポツカ」という言葉が残っている。

鳥越峠・戸土道筋に育つ杉の並木
 自費を投じて、道筋に杉を植えたという戸土の住民赤野清三郎。幼杉も豪雪荷押し潰されたであろうが、今は、日差しを遮り、日和りとなって旅人有難い道しるべ。

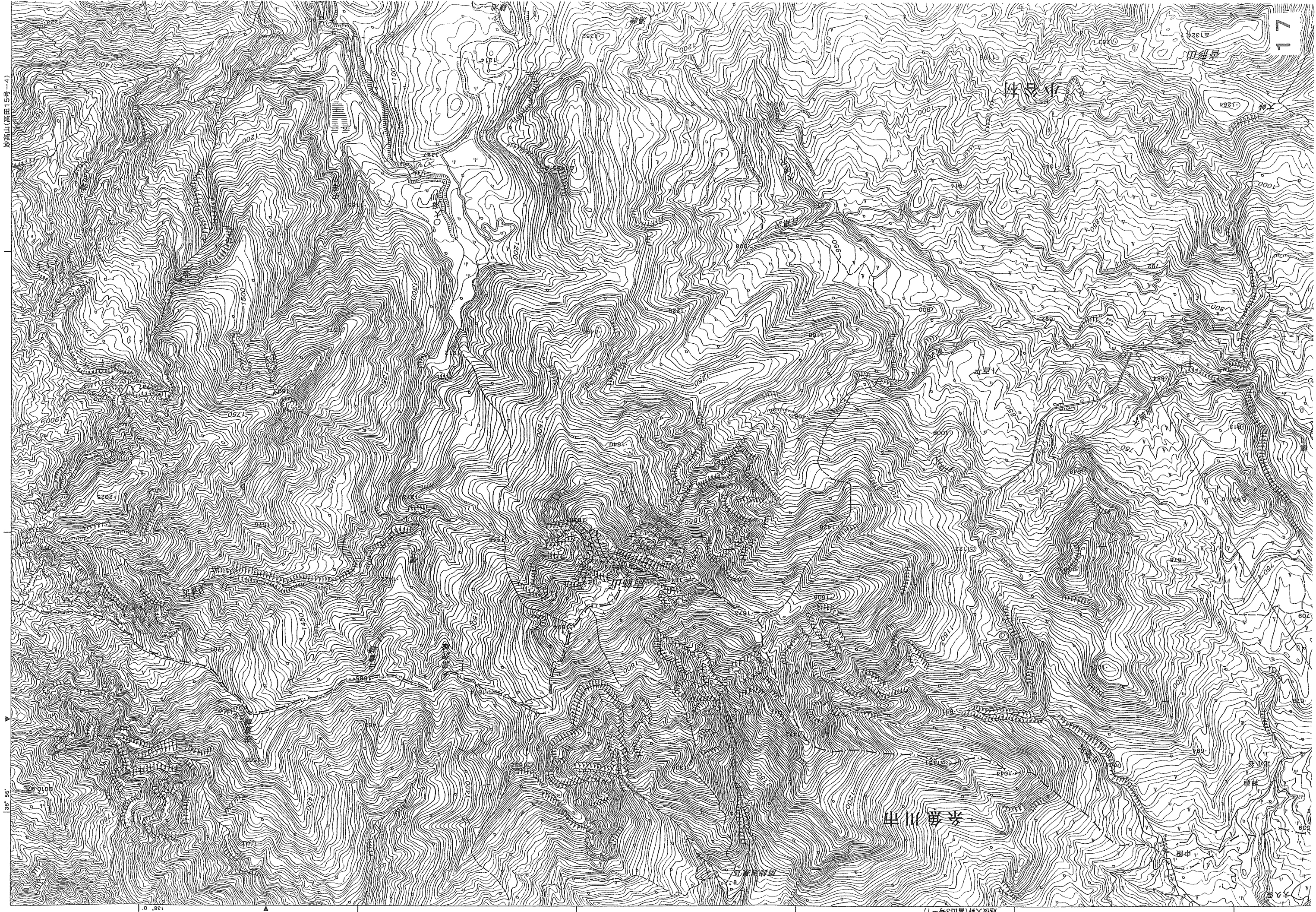
信州で唯一海が見える戸土分校 信越境に建つ戸土分校の窓からは海が見える。晴れた日には日本海の水平線がくつきり見え、浮き島のように浮かぶ能登半島、夜には窓からイカ釣りの灯りさえも見えたものだ。条件がいいと遠く佐渡島が絵のようだった。



元禄十三年（1700）に信越国境論争があつた。戸土と横川集落は越後の領地であるという根知区山口村の言い分と戸土横川は信州の領地であるという小谷村の言い分とが真つ向から対立した論争があつた。しかし白池端の諏訪大明神の敷地に七年に一度の難き鎌打ちの神事、正保二年（1645）の国絵図、横川に育つ橋木一本の進上願いが松本城主に申し出があつた事など信州側の言い分が認められて完勝に終わった。幕府側による国境を決めるに当たっては場所々々で狼煙を上げたりしたためか今も角間池・戸土境の宮間の県境の線引きは空白になっている。



4 1.9 4 cm



砂礫山(高田15号-4)

36° 55'

136° 0'

越後大野(富山3号-1)

17

糸魚川

山合

糸魚川市

中野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

比例尺 1:25,000
 地形图总说明 地形图总说明 地形图总说明

比例尺 1:25,000
 地形图总说明 地形图总说明 地形图总说明

雨崩山

